

# プレースメントとしてのクローズテスト

小川 多恵子

## 要 旨

語学教育に於いてはまず始めに適正なクラス分けが必要である。そのためのプレースメントテストがどの教育機関でも行われているが、このテストは簡便でかつ精度の高いものが望ましい。ここではクローズテストを取り上げ、筑波大学で行われている従来の方法のプレースメントテストと比較し、その有用性を確かめた。また日本語力の違いがどの様にクローズテストに現れるかも考えた。クローズテストとしては文字単位に欠落させたものを用いた。

〔キーワード〕 プレースメントテスト、クローズテスト、解答パターン  
文字単位欠落テスト、日本語力

## 1. はじめに

日本語学習者にプレースメントテスト (PTテスト) を行いクラス分けをすることが日本語教育を行う際まず第一に必要なが、留学生が年々多くなっている現状ではクラス分けのためのPTテストは、教師に多大の時間と労力を強いているとともに、学習者にとっても期日の決められた長時間の試験を受けなければならないということで不便を強いている。学習者個々の学習上の問題点がどこにあるかは別にしても、何かもっと簡単な方法で日本語能力の大体が測れないか。

W. L. Taylor(1953)により提唱されたクローズテスト (CLテスト) は外国語のテストとしてデクテーションと読みに関係があり、通常のデクテーションより総括的であり、かつ外国語の広い範囲のスキルを測るのに有益であるというJ. W. OLLER(1972)による研究が出されて以来、多くの研究がなされている。日本語に関してもCLテストが有効ではないかという研究は早くは芝祐順(1957)によるものがあるがその後、秦喜美恵(1983-)による一連の研究によりテストの信頼性、妥当性などが調べられている。

CLテストの最も一般的定義は、テキストからシステムティックに語の欠落を作り、その欠落した語を受験者に埋めさせるというものであるが、語とは何か、システムティックとは何語ごとを言うのか、などにははっきりした定義はない。

Taylor(1953)によると、このテストはその言語独自の配列機構及びその文章の構造にどれだけ慣れているかを見るものであり、読み易さすなわち意味をつかめる相対的易しさ、早さ、正確さなどの測定になっているという。しかしその後の研究でCLテストは聞く能力に強く関係すること

も判っており、その意味でまさにグローバルな外国語能力を測定でき、プレースメントテストとして適しているものと思われる。

ここではPTテストとしてCLテストを使ったとき、現在筑波大学留学生センターで行っているPTテストの代替として使えるのかということを中心に主眼として考える。さらに初、中、上級とランクが違ってくる時、それぞれのランクの学習者にとってどの様な問題ができ、またはできないかを調べることにより日本語力の違いがどの様に解答に反映されているかを考える。

## 2. モデルについて

まず欠落させる語を通常行われているように単語とするか、単語の半分とするか又は文字とするかということが第一の問題となる。PTテストの代行としてCLテストを考えるとき、当然受験者の日本語力はそれほど高くない。英語であればたとえ初級者であっても初心者でない限り単語と単語の間が離れ apple という文字列があればアップルと読みくりんどだと理解し、決してエ・ピ・ピ・エル・イと読んでくりんどだと理解しないであろう。しかし一般の日本語のように分かち書きせず書いてある時、彼らは一語一語 り・ん・ご と読んで”りんご”だとおもい<apple>と理解するのであり、決して文字の羅列の中からすぐに”りんご”とひとまと目には読めないであろう。

また表音文字が音節の中でも同じように発音できる日本語に於いては、文字の一つ一つが意味があるとも言える。芝祐順(1957)の研究によると厳密に原文と同じになることを求めた場合、日本人においては単語単位の欠落したCLテストは問題文の難易さを測るのに適しており、文字単位の欠落したそれは特に読物の場合、個人差が大きいという。そのため問題文の難易度を識別し、読み能力を見るためには単語単位の欠落させた方がよいかも知れないが、PTテストとして使うためには問題文の難易さ以外のものも見つめるため、単語単位より文字単位で欠落させた方がより適切であると考え、ここでは文字単位に欠落させたCLテストを考えることにした。孔の位置は抜き取り率が10-20%の時日本人的中率が高いこと及び読み手は視野内にはいる語彙を見、初級者ほど視野が狭くなること、さらに短期記憶が7チャンク<sup>2)</sup>であること、単語の場合も5から7語ごとに孔を空けることが多いことを考え原則として7文字ずつに孔を空けた。

問題文の難易度及び親密度が結果に影響を及ぼす(J. L. Anderson 1983)ことを考え、問題文としては小説ではなくより中性度が高いものを選んだ。また難易度による日本語力の違いを見つめるため問題文は二つ与えた。一つは初級読物のテキストから取った「働きすぎの日本人」であり、他の一つはお天気コラム欄の文を若干手直した天気用語「春一番」の説明文である(資料参照)。いずれもその文章の題とともに本文を呈示した。二つ目の問題文に関しては古文的言い回しも一、二入っている上、内容に関してもどの受験者にとっても余り親密度はないであろうと考えた。

採点については元のテキストと同じで無くとも意味が通じるもの、漢字は判読できる程度の間違い、または漢字でなく仮名で書いてある場合も正しいとした。ただし意味が判っても日本語と

して正しくないもの、パーセントをバアセントと書いたものや月給を月金としたものなどは誤りとした。また問題の最後に簡単な問いを付け加え問題文をどの程度理解しているかも調べた。

時間については一応30分としたが余りこだわらなかった。ただし30分過ぎても2つ目の問題文にまだとりかかったばかりのような受験者は除いた。適正時間及び時間による補正点も考えることが必要かも知れない。

被験者は筑波大学の日本語補修コースを92年度春受講する予定の留学生（大学院及び研究生）のうちの53人である。このうち19人は91年度補修コースからの進級者などでPTテストを免除されている。そのため日本語力のランク別による解答パターンの違いは全員について見ることができるが、PTテストとの比較は34人についてのみ行った。

### 3. PTテストとCLテストの結果の比較

PTテストは語彙、聴解、文法、読解、文字と分けて行っているが、クラスわけは総合点で行っているため、ここでは総合点のみに着目して関係を調べた。PTテストとCLテストの両方を受験した被験者34人の内訳はPTテストで上級（A）と認定されたもの11人、中級の上（B）15人、中級の下（C）8人である。これら各グループの平均値と分散、およびAB間、BC間の相関比を下記の表1に示す。

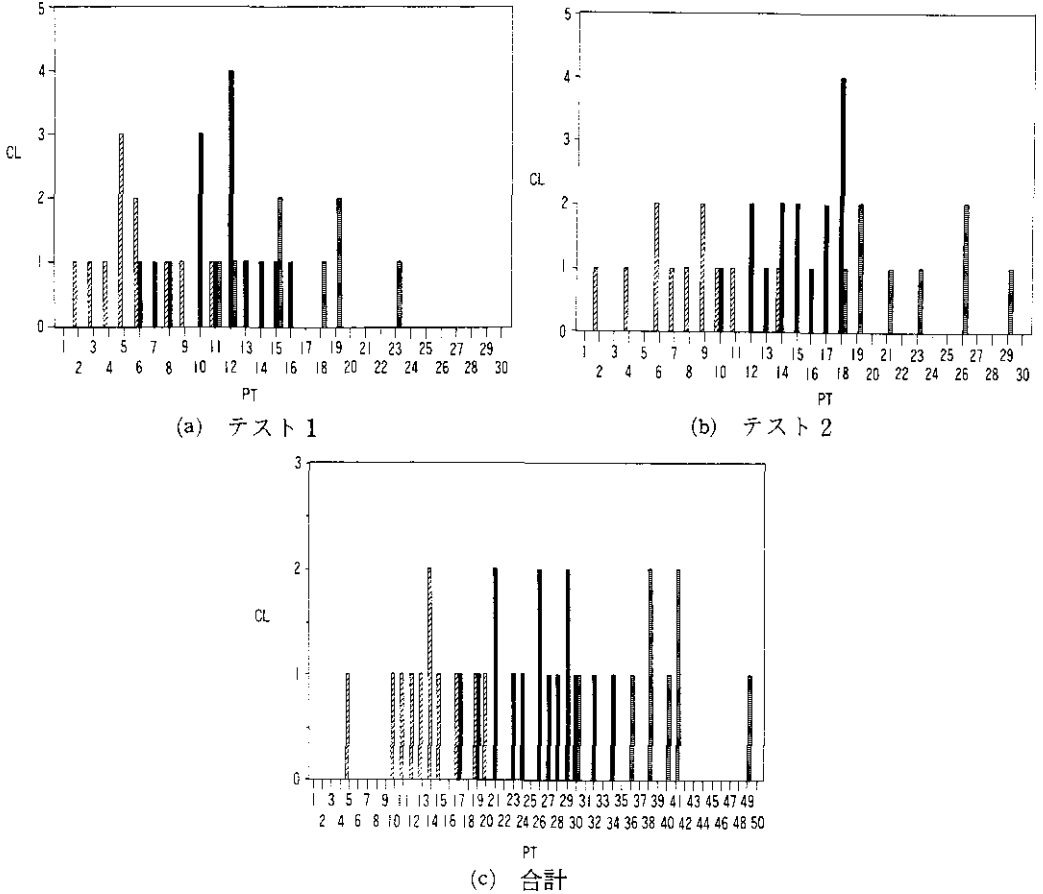
〈表1〉 CLテストの平均と分散、グループ間相関比

	テスト1		テスト2		全体	
	平均	分散	平均	分散	平均	分散
A	7.5	20.2	9.4	34.2	16.9	94.3
B	9.8	13.8	14.3	6.4	24.1	27.4
C	15.6	16.7	22.0	16.5	37.6	35.2
T	10.4	25.8	14.5	39.5	25.0	109.9
相関比	A B 0.27		0.51		0.44	
	B C 0.59		0.75		0.76	

ただしCLテストは誤答数の平均であり、全体はテスト1とテスト2の合計である。

平均点のみを見るとCLテスト1及び2の双方とも各グループ毎に違いが現れている。しかし相関比がAB間では小さいことから各々のグループが余り独立していないことが予想される。そこでテスト1、2及び総誤答数に関し、図1で縦軸に人数、横軸に点数を取ったグラフを書き実際の点数の分布を見てみる。

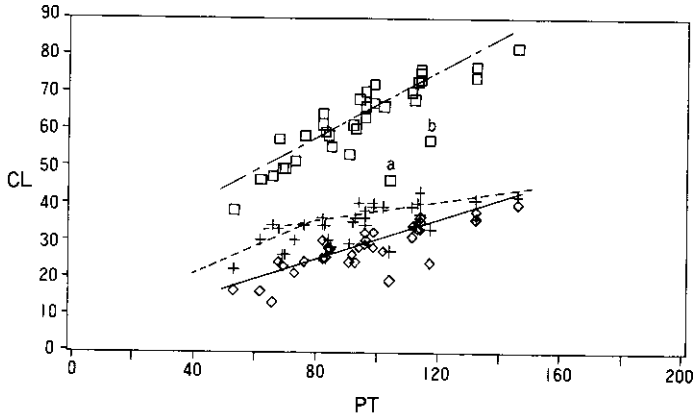
〈図1〉 CLテスト1、2及び合計の誤答数と人数



斜線／はAクラス、黒地はBクラス、横線三はCクラスである。

これらを見るとテスト1では各グループが混ざり合い、特にAグループとBグループの差がつけにくく、テスト2ではもちろん混ざり合いはあるものの上位者と下位者が分けられ、3つのグループに違いがみられることが判る。グループの違いは総誤答数図1(c)でみると一番よく現れている。テスト1に余り差がみられないのは、テスト1が初級の教科書から取ったものであるものでA、Bクラスの学習者にとって難易度に余り差が無いことに寄るのであろう。テスト2は受験者により難易度に差があるのでグループの差が現れ易かったと思われる。しかし、テスト各々の孔はシステムティックに取ってあるので問題に現れているテーマは語彙力あり、助詞あり、動詞の変化あり・・・と色々あり、たまたまそれができたかどうか個人差が反映するため総誤答数に一番日本語力が現れるのであろう。図2に各被験者のCLテストの点を縦軸に、PTテストの点を横軸に取ったグラフを描く。

〈図2〉各被験者毎のCLテストの点とPTテストの点の関係



□印はCLテストの総合得点、+印はテスト1、◇印はテスト2の点である。

テスト1、テスト2及び総誤答数はほぼ直線に乗っているように見え、実際PT—合計間の相関係数は0.93、PT—テスト1で0.76、PT—テスト2で0.91である。テスト1の係数が他の係数に比べ若干悪いのはPT得点のほぼ下から1/3～1/4のところで折れ曲がっているように見えるからである。そこで2本の線として描くと上部の勾配は図中、点線で示したように非常に緩くなる。これを見てもテスト1ではAランクとBランクの点数に差がなく分類できにくいことが判る。飛び離れた点の被験者がいるため相関比が小さくなっているため、これらa、bの被験者を除き、最小自乗法で求めた直線を図2に描いた。総誤答数はほぼ直線に乗っており、勾配も0.45であることからCLテストはPTテストとよい相関がある上判別可能な差異を示すことがわかり、PTテストの代わりとして使えることを示している。

例外として除いた2人の被験者に付いて少し詳しく考えると、どちらもPTテストでAランクと判定されている被験者であるが、一人は図のaである。この被験者の場合テスト1もテスト2もいずれも成績が悪く、特にテスト2はほとんどできていない。かりにPTテストの間違いとしてもCランクのものをAランクに間違えようとは思えない。なぜ被験者aはCLテストでこのように成績が悪いのであろうか。また被験者bの場合も気になる。被験者aの場合PTテストの点はAグループの中では最低であり、むしろBグループに位置づけられるものであったとも考えられる。しかし、被験者bのPTテストの点はよいのに関わらずCLテストの点は悪い。CLテストには一種のクロスワードパズルを解くような能力が要求されるという意見がある。また文章がある程度理解できれば、少し注意深く見さえするのなら前に現れた語そのままであることが判る場合もある。しかしそのような、推測をするという能力が無い場合は日本語力如何に関わらず孔を生めることができないのであろうか。あるいは読解速度が遅く最後迄やったが非常にラフにやったのかも知れない。しかし読解速度が遅いと言うことは単語その他の認識能力に劣り、長期記憶とのマッチン

グが遅いということである。判っているかいないかを中心としてみるテストではこのような能力は見落とされることがあるのかも知れない。またCLテストは筑波大学においてはなじみのないテストであるため、適応力の無い人間に取っては戸惑いがあったとも考えられる。

ちなみにPTテストの各分野との相関を見るときわだった違いはないが一番高い相関を示しているのは語彙であり、2、3に聴解、文法である。受験者a、bは共に語彙、文法が相対的に弱いAランクの中に他にも同等の語彙力、文法力を示している者もいる。しかし双方ともに弱いのは受験した中ではこの二人かも知れない。

しかしPTテストによるクラスわけも必ずしも完全でないことを考えると上記1、2の例外を除いて極端な差異はみられず、少数のクラス移動はあるとしてもCLテストによるクラスわけはPTテストと同じ傾向を示している。ゆえに、CLテストによるクラスわけは可能であると結論づけられると思う。

#### 4. 日本語力による解答パターン

被験者53人をCLテストの成績によって3つのグループA(15人)、B(21人)、C(17人)に分ける。分けた基準は誤答数でAが、テスト1<10点、テスト2<12点で且、合計<17点、Bはそれ以上であり、テスト1<11点、テスト2<20点で且、合計<29点、Cはそれ以上である。このように分けているのでテスト1だけを見ればAグループの被験者よりBグループの被験者の点が高いことも有り得る。各グループ毎の平均点、分散およびグループ間の相関比を表2に示した。また各グループ毎に良くできた問題順に問題番号と誤答率を表3に示した。

〈表2〉各クラスのCLテストの平均値と分散

	テスト1		テスト2	
	平均	分散	平均	分散
A	5.3	3.4	8.2	7.8
B	8.6	5.3	14.9	7.6
C	16.4	17.5	22.1	26.3
T	10.2	28.8	15.3	42.7
相関比	AB	0.60	0.76	
	BC	0.77	0.67	

〈表3〉各クラス誤答の少ないものから問題順に並べた誤答率

(a); テスト1、(b); テスト2

合計		A		B		C	
問題No	誤答率	問題No	誤答率	問題No	誤答率	問題No	誤答率
18	0.0	44	0.0	42	0.0	18	0.0
36	1.9	40	0.0	36	0.0	10	0.0
32	1.9	39	0.0	34	0.0	44	5.9
14	1.9	38	0.0	32	0.0	36	5.9
10	1.9	37	0.0	31	0.0	32	5.9
7	1.9	36	0.0	18	0.0	26	5.9
44	3.8	35	0.0	14	0.0	23	5.9
26	3.8	32	0.0	7	0.0	14	5.9
2	3.8	31	0.0	6	0.0	7	5.9
1	5.7	26	0.0	44	4.8	2	5.9
31	7.5	23	0.0	26	4.8	1	5.9
13	7.5	18	0.0	25	4.8	9	11.8
39	9.4	17	0.0	13	4.8	39	17.6
38	9.4	16	0.0	10	4.8	38	17.6
17	9.4	14	0.0	2	4.8	17	17.6
9	9.4	13	0.0	1	4.8	13	17.6
6	9.4	10	0.0	39	9.5	31	23.5
25	11.3	9	0.0	38	9.5	25	23.5
23	11.3	7	0.0	28	9.5	16	23.5
28	15.1	6	0.0	17	9.5	28	29.4
16	15.1	2	0.0	37	14.3	27	29.4
42	17.0	43	6.7	27	14.3	6	29.4
34	17.0	42	6.7	12	14.3	12	35.3
27	17.0	30	6.7	11	14.3	37	41.2
37	18.9	29	6.7	9	14.3	35	41.2
35	20.8	28	6.7	35	19.0	34	41.2
29	24.5	27	6.7	29	19.0	42	47.1
12	24.5	25	6.7	16	19.0	29	47.1
11	28.3	1	6.7	43	23.8	30	52.9
43	30.2	41	13.3	40	23.8	24	52.9
19	34.0	34	13.3	23	23.8	19	52.9
40	35.8	19	13.3	21	23.8	5	52.9
30	35.8	11	13.3	19	33.3	43	58.8
21	35.8	24	20.0	15	38.1	21	58.8
24	41.5	21	26.7	8	38.1	11	58.8
41	43.4	12	26.7	5	38.1	3	58.8
5	47.2	20	33.3	41	42.9	41	70.6
3	47.2	8	33.3	30	42.9	15	76.5
15	50.9	15	40.0	3	42.9	4	76.5
8	50.9	3	40.0	24	47.6	40	82.4
20	56.6	4	46.7	20	52.4	20	82.4
4	58.5	33	53.3	4	52.4	8	82.4
33	66.0	22	53.3	33	57.1	33	88.2
22	73.6	5	53.3	22	76.2	22	88.2

(a)

合計		A		B		C	
問題No	誤答率	問題No	誤答率	問題No	誤答率	問題No	誤答率
38	1.9	38	0.0	38	0.0	38	5.9
25	1.9	34	0.0	26	0.0	25	5.9
19	1.9	27	0.0	25	0.0	19	5.9
18	3.8	26	0.0	19	0.0	18	11.8
2	3.8	25	0.0	18	0.0	2	11.8
26	5.7	24	0.0	10	0.0	29	17.6
23	7.5	23	0.0	2	0.0	26	17.6
24	9.4	22	0.0	23	4.8	24	17.6
20	9.4	20	0.0	20	4.8	23	17.6
6	9.4	19	0.0	6	4.8	27	23.5
29	11.3	18	0.0	29	9.5	20	23.5
10	11.3	17	0.0	24	9.5	6	23.5
27	13.2	16	0.0	16	9.5	4	23.5
4	13.2	11	0.0	27	14.3	13	35.3
16	20.8	10	0.0	11	14.3	10	35.3
11	20.8	7	0.0	4	14.3	36	47.1
13	24.5	6	0.0	17	19.0	32	47.1
17	26.4	4	0.0	34	23.8	22	47.1
34	28.3	2	0.0	13	23.8	11	47.1
22	30.2	40	6.7	7	23.8	8	47.1
7	30.2	29	6.7	41	33.3	16	52.9
36	34.0	14	6.7	36	33.3	34	58.8
8	34.0	9	6.7	30	33.3	17	58.8
3	35.8	21	13.3	15	33.3	14	58.8
14	39.6	15	13.3	3	33.3	3	58.8
31	43.4	13	13.3	31	38.1	35	64.7
30	45.3	8	13.3	22	38.1	7	64.7
15	45.3	3	13.3	8	38.1	41	70.6
9	45.3	36	20.0	14	47.6	31	70.6
41	49.1	31	20.0	40	52.4	9	70.6
40	50.9	30	20.0	9	52.4	39	76.5
35	52.8	35	26.7	35	61.9	37	76.5
32	52.8	42	40.0	39	66.7	28	76.5
21	64.2	32	40.0	32	66.7	30	82.4
42	67.9	41	46.7	42	71.4	42	88.2
39	67.9	1	53.3	21	71.4	40	88.2
37	73.6	39	60.0	37	81.0	15	88.2
1	79.2	37	60.0	1	85.7	12	94.1
33	84.9	33	60.0	33	90.5	1	94.1
28	86.8	28	86.7	12	90.5	33	100.0
12	92.5	12	93.3	28	95.2	21	100.0
5	98.1	5	100.0	5	95.2	5	100.0

(b)

これを見て判るようにCグループの分散は比較的大きいのにも関わらず、相関比はいずれのグループ間もだいたい良い値を示しているのでグループ分けはおおよそ適切であることが判る。またCグループの被験者が誤答率10%以下で良くできているのはテスト1では1)、2)、7)、10)、14)、18)、26)、32)、36)、44)、45)であり、テスト2では19)、25)、38)である。そして当然B、Cグループに於いてもよいできを示している。これらはいずれもよくでてくる語や動詞などの語尾であり、かつそこだけ読んで判るものである。そのため2-3)の「秒速8メートル(ル)」でルを入れさせる問題はたぶん秒速が読めない上意味も判らなかつたので易しいのにできが悪かつたと推測される。また2-11)の「花散(ら)しの花は」と言う問題は前にでている語で文脈さえ捕まえていけば問題無いものなのでこのようなところにグループごとの差が現れている。同様に1-42)は「週休(二)日の方が」でこれも前にでている語であり、内容さえ判っていれば問題ないためこのテキストを難しいと感じるか否かで分かれ目ができAおよびBグループとCグループの間に大きい差ができた。逆にAグループで誤答率40%以上でできの良くなかつたものはテキスト1では3)、4)、5)、15)、22)、33)などであり、2では1)、5)、12)、28)、33)、37)、39)などである。これらは当然BおよびCグループでもできが良くないと予想したところ1-5)は他のグループではそれほど悪くなかつた。問題は「週休二日(で)、」と連用中止を使うものだが何故Aグループのできが悪かつたのかは判らない。また2-28)もCグループでも意外と他のグループと差がなかつた。これは「春遠(か)らじ」と古語を使うものなので、被験者の専門によるのかも知れない。いづれにしてもできの良くなかつたものは語彙に関するもの及びその部分だけでなくもう少し広く内容が判っている必要があるものである。また2-30)「花を散らす(強)い風」も散らすの意味が判っていないのでCグループではできが良くなかつたと考えられる。さらに、不愉快、ほこり、反面などの語彙を知っていたかどうかでも上位と下位の違いとして指摘される。

すなわち上位者と下位者の違いは孔にはいる語がそこだけ見てわかるような、制約が強かつ易しいものの場合には現れず、少し広い範囲でみなければならぬものおよび語彙、漢字、語の意味などが判っていないとならないものに大きな差が現れるといえる。

表4に全受験者のテキスト1、テキスト2の誤答数及び総誤答数を誤答数の順に表した。これを見て判ることは上位の被験者の場合はテキスト1、テキスト2双方の成績がよいが、中位になるに従いテキスト1の成績は良くてもテキスト2の成績が悪くなり、その後、段々とどちらの成績も悪くなっていくということである。テキストの後ろに簡単な問いをつけて於いたが、これを見るとテキスト1はほぼ全員が正しい答えをしているがテキスト2では上位の被験者を除いて正しい答えをしたものは少ない。しかし上から17位の被験者の場合テキスト1の問いに明らかに間違っている(2)を選んでいるのに誤りは4であった。このことからテキストが理解できることが正答を与えるための大きな要素とはなっているが、それだけではないことが判る。E. Dガニエ(1989)によると読解力には段階的な差異があるという。まず第一段階は符号解読であり、第二に逐語的理解であり、第三に推論的理解、最後に理解のモニタリングであるが、この語単位の欠落



表4 全被験者のテスト1、テスト2及び総誤答数の一覧表

順位	合計	TEST1	TEST2	順位	合計	TEST1	TEST2
1	5	3	2	28	24	11	13
2	10	4	6	29	24	8	16
3	11	5	6	30	26	9	17
4	11	2	9	31	26	10	16
5	12	5	7	32	27	7	20
6	13	3	10	33	27	9	18
7	13	9	4	34	28	11	17
8	14	5	9	35	29	11	18
9	14	8	6	36	29	10	19
10	15	5	10	37	29	15	14
11	16	6	10	38	30	12	18
12	17	7	10	39	30	12	18
13	17	5	12	40	32	17	15
14	17	6	11	41	34	16	18
15	18	7	11	42	35	14	21
16	18	5	13	43	36	15	21
17	18	4	14	44	36	12	24
18	19	5	14	45	38	19	19
19	19	11	8	46	39	18	21
20	20	6	14	47	39	19	20
21	21	9	12	48	41	15	26
22	21	6	15	49	41	11	30
23	23	11	12	50	41	18	23
24	23	11	12	51	42	15	27
25	23	8	15	52	49	23	26
26	23	7	16	53	62	28	34
27	24	11	13				

したCLテストにおいては第二段階程度の読みでほぼ70%ぐらいはできるのではなかろうか。そのため全体の意味が判らなくても、ある一部だけが解れば正答が得られるということになり、そのため逆にまた読解力以外の総合的日本語力が測られるともいえる。

## 5. まとめ

本来単語単位のCLテストも行い比較すべきであったが、試験をするための都合のよい時期が余り無いためできなかった。そのためより判別に適していると思った文字単位のものに限って調べてみた。しかしこの範囲に於いてもCLテストの点とPTテストの点の相関は図2で見るとよく、CLテストをPTテストとして使えることが分かった。

従来クラスわけは各レベルのクラス数が決まっているため、PTテストの点によって各クラスの人数が適正になるように行っている。しかし、予備教育と違い補習コースの場合は各クラスのレベルは時期によらず一定であるべきで、その時その時の受講者のレベルによりコースのレベルが違うと言うのはおかしい。そのためにはPTテストにある基準(点)を決めてレベルわけを行い、

クラス数はその後調整することが望ましい。解答パターンから分かるようにCLテストでは、上級コースは難しいテキストでも易しいテキストでも同じように点が取れ、中級の上では易しいテキストなら点が取れる。さらに中級の下になるとどちらの点も余り良くないが適当に部分的に点が取れ、初級コースはよく使う単語や言い方などで、そのみで正しいもののみ答えられるだろうが時間が非常にかかるということで分けられ、適当なテキストを使うなら客観的な判別基準点が決められる。この場合さらに問題のいくつかには重みを付けるなどすればより基準がはっきりするものと思われる。

またここでは無視したがテストにかかる時間の問題もある。時間切れでサンプルに加えなかったものを見るといづれもできは良くない(即ち、これが初級コースにあたる)。基準点をきめるときには使用時間も関係させる必要があると思われる。

PTテストを単にクラスわけのみに行うなら短時間のできるCLテストはよい方法であるだろう。そして各学習者の個別の問題点の抽出は別に現在研究中の診断テストを行うことによりはっきりさせることが教師、学習者双方にとって有益であると思われる。

#### 注

1) 現在筑波大学留学生センターのPTテストは毎年春秋2回のコースの前にそれぞれ行われ、文法、読解、聴解、漢字、語彙の5項目からなる各30問、合計150問からなっている。4肢選択ではあるが実施に2.5時間かかり、事前(1週間前)に申し込んだ者のみ受験できるシステムになっている。

2) 人間の直接記憶の範囲は7語であるといわれ、語の形式を取らないなら7文字、無意味な音節なら7個、意味のある単語のようなものは7つを短期記憶として覚えられるという。すなわち脳の中で個々の刺激をより大きな単位に再コード化するが、このとき再コード化できる単位をチャンクといい、これが7つ程度だということである。G. A. Miller(1956)によって用いられた認知心理学の用語。

G. A. Miller(1956) *The magical number Seven plus or minus two*

## 参考文献

1. E. Dガニエ(1989) 「学習指導と認知心理学」パーソナルメディアK. K
2. 市川保子、小川多恵子(1992) 「既習力診断テストのための文法マップの一試案」  
日本語教育論集 7 ; P155
3. 市川保子、山元啓史(1993) 「コンピュータによる既習者のための事前診断テスト」 日本  
語教育 78 印刷中
4. 芝 祐順(1957) 「読み易さの測り方・・・クローズ法の日本語への応用」  
心理学研究 28 ; P67
5. 秦 喜美恵(1983) 「クローズ法による日本語能力の測定」国際基督教大学学報  
1 - a 教育研究25
5. 泰 喜美恵(1990) 「日本語クローズテスト…クローズテストから日本語変形c-テストへ  
…採点法の問題を中心に」言語文化論集 11 ; 2 その他
6. C. Klein-Braley(1983) "A cloze is a cloze is a question" *Issues in Language Testing  
Research*, p218; Ed. J. W. Oller, Jr, Newsbury House
7. E. Shohamy(1983) "Interrater and intrareter reliability of the oral interview and concur-  
rent validity with cloze procedure in Hebrew", 上記書P229
8. J. C. Anderson(1983) "The cloze procedure and proficiency in English as a Foreign  
language", 上記書P205
9. J. D. Brown(1983) "A cloze look at cloze" ; Validity and Reliability, 上記書P237
10. Oller, J. W., Jr(1972) "Scoring Methods and Difficulty Levels for Cloze Tests of proficien-  
cy in English as a Second Language", *Modern Language Journal*, 56 ; P151
11. Taylor. w. L (1953) "Cloze procedure:a new tool for measuring readability", *Journalism  
Quarterly* 30 ; P415

[資料] クローズテスト

問題1

働きすぎの日本人

最近アメリカやヨーロッパの人々は、日本人が働きすぎるといっています。ほんとうに日<sup>1</sup> ( )人はあまり休<sup>2</sup> ( )ません。アメリカ<sup>3</sup> ( )ヨーロッパの<sup>4</sup> ( )では週休二日<sup>5</sup> ( )、夏休みも一ヶ<sup>6</sup> ( )ぐらいだと聞<sup>7</sup> ( )ました。週休二日<sup>8</sup> ( )は一週間に休<sup>9</sup> ( )が二日あるこ<sup>10</sup> ( )です。今の日本<sup>11</sup> ( )は、毎週、週休二日<sup>12</sup> ( )会社は7.3パ<sup>13</sup> ( )セントしかあ<sup>14</sup> ( )ません。しかし<sup>15</sup> ( )に2回だけ週<sup>16</sup> ( )二日という会<sup>17</sup> ( )が増えてきま<sup>18</sup> ( )た。また夏休み<sup>19</sup> ( )、ふつう三日か<sup>20</sup> ( )一週間です。1ヶ月<sup>21</sup> ( )夏休みなどは<sup>22</sup> ( )えられません。日本<sup>23</sup> ( )はそんなに働<sup>24</sup> ( )のが好きなの<sup>25</sup> ( )でしょうか。1<sup>26</sup> ( )89年、新聞社が大<sup>27</sup> ( )生に自分が入<sup>28</sup> ( )たい会社を選<sup>29</sup> ( )とき、何を考え<sup>30</sup> ( )すかと調査し<sup>31</sup> ( )した。80パー<sup>32</sup> ( )セントの学生が、<sup>33</sup> ( )の会社が週休<sup>34</sup> ( )日制かどうか<sup>35</sup> ( )考えると答え<sup>36</sup> ( )した。さらに、月<sup>37</sup> ( )が安くても休<sup>38</sup> ( )が多い方がい<sup>39</sup> ( )ですかという<sup>40</sup> ( )間に、2-3万<sup>41</sup> ( )安くても週休<sup>42</sup> ( )日の方がよい<sup>43</sup> ( )60パーセント<sup>44</sup> ( )学生が答えま<sup>45</sup> ( )た。ですから { }

問い

{ } 中にはいる一番適当な文の番号に丸を付けなさい。

- 1 これからは月給が安くなるでしょう。
- 2 日本人はこれからも働きすぎるでしょう。
- 3 これからは休みが多い生活になるでしょう。

## 問題 2

### 〈お天気用語〉 春一番

花あらし、花散らしともいい、春になって低気圧が日本海に入ってから急に発達したと<sup>1</sup>( )吹く風のこと<sup>2</sup>( )す。秒速 8 メートル<sup>3</sup>( )を越えること<sup>4</sup>( )あります。その<sup>5</sup>( )初めてこの強<sup>6</sup>( )風が吹くのを<sup>7</sup>( )一番といい、東京<sup>8</sup>( )吹く平均日は 2<sup>9</sup>( )25 日といわ<sup>10</sup>( )ています。花散<sup>11</sup>( )しの花は言わ<sup>12</sup>( )と知れた桜の<sup>13</sup>( )とです。でも、2 月<sup>14</sup>( )桜が咲くはず<sup>15</sup>( )ないのにと不<sup>16</sup>( )議に思う人も<sup>17</sup>( )るかも知れな<sup>18</sup>( )ですね。

実は春一番と<sup>19</sup>( )う言葉は天気<sup>20</sup>( )報で使うより、<sup>21</sup>( )から人々が使<sup>22</sup>( )ていた言葉で、<sup>23</sup>( )レビでよく使<sup>24</sup>( )れる言葉なの<sup>25</sup>( )す。春一番が吹<sup>26</sup>( )ましたと聞く<sup>27</sup>( )、たしかに春遠<sup>28</sup>( )らじと感じま<sup>29</sup>( )が、花を散らす<sup>30</sup>( )い風は春三番<sup>31</sup>( )らいにあたり<sup>32</sup>( )す。春を告げる反<sup>33</sup>( )、関東地方など<sup>34</sup>( )は砂ぼこりが<sup>35</sup>( )き上げられ、空<sup>36</sup>( )オレンジ色に<sup>37</sup>( )えることもあ<sup>38</sup>( )ます。そんな日<sup>39</sup>( )髪の中までは<sup>40</sup>( )りまみれの不<sup>41</sup>( )快さを味わわさ<sup>42</sup>( )ます。 { }

### 問い

{ } に入る一番適当な文の番号に丸を付けなさい。

- 1 いかにも春らしいと思いませんか。
- 2 こんな強風にあったら桜もひとたまりもありません。
- 3 これなら桜も散らずにすみますね。